

特集

ペット



ペットブームが世界へ広がりつつある。ペットをもつ民族のあいだではその家族化がすすみ、ペットをもたない民族のなかにも愛玩動物が誕生しつつある。特集では、人とペットとのこれからの共生について、古今東西の事例から考えたい。



オウムとあそぶ子ども(アマゾン)



片時も離れない老人と最愛の友(ミュンヘン)



東京都内のペット霊園

人とペットの共生社会

吉田 眞澄

(よしだ ますみ)

帯広畜産大学教授

人との関係に変化

人とペットの関係を「共生」と表現するのは間違いであると考えられる人は多い。しかし、イヌやネコが人の社会に入ってきたときの状況を見ると、共生ということばの力テゴリーに入りうる関係が明確に存在した。人とペットの関係がその延長線上にあり、心の問題を含めた相互互恵の関係を考えると、それを共生ということばであらわしうることを否定できない。

ペットはイヌとネコに代表されるが、人が集団生活を重視する場合はイヌが、個人生活を重視する場合はネコが、より重要な位置を占める。イヌの祖先が集団生活をし、ネコの祖先が単独で生活していたことを考えると当然の結果である。



イヌも乗れる地下鉄(ミュンヘン)



ドッグラン(ニューヨーク)

都市化が進めば進むほどイヌの飼養数が減り、ネコが増えて、飼養数が逆転することにも、住環境の問題に加え、イヌとネコの本来の生活スタイルの違いが影響している。現在では、ペット先進国の大多数で数の逆転現象が生じているが、わが国は、イヌ人気が強固で、東京を除くすべての地域でイヌの数がネコ

の数を上回っている。個人より集団を大切にする風潮があるかどうかを含め、その原因を探ることは、それなりの意味がある。
イヌとネコがペットの代表とされるのは、飼養数とともに、人との関係の濃密度も見逃せない。長期にわたるペットブームで飼養数が増え続けた結果、現在

では、一三〇〇万頭を超すイヌと、一〇〇〇万匹を超すネコが飼養されているといわれている。世帯数との関係で単純計算をすると、二世帯に一頭以上のイヌかネコが飼養されているという大変な数字になる。数もさることながら、人との関係も変化し、多くの飼い主が、ペットを家族の一員と考えるようになった。戦後、家族関係に大きな変化が生じたにもかかわらず、家族について十分な整理がされないままペットブームを迎えたところに一因があると思われるが、家族とペットの両面からの検証が必要である。

求められる社会システム

いずれにしても、ペットは、個人、家族、社会のそれぞれとの関係を深めており、ペットが現代社会にとって重要な問題になっていることは間違いない。ペットを飼っている人、いない人、好きな人、嫌いな人など、ペットに対する立場の違いや考え方の違いに関係なくすべての人がペットを理解し、それぞれの立場から知恵を出し合い、ペットの愛護や福祉の問題をも視野に入れ、今以上に納得できる社会システムを構築することが求められている。それができて初めて、飼い主とペットの関係を越え、社会システムとして人とペットの共生が実現されるのである。

古代人が飼ったペット

松井 章
(まつい あきら)

奈良文化財研究所
環境考古学研究室室長

イヌの起源

動物の子どもはおしなべて可愛い。ヒトを含む動物は、その子どもが無防備な可愛らしさによって身を守り、生き延びようとしているとすらすらには思える。家畜化はおそらく、野生動物の子どもを愛玩することから始まっただろう。オオカミは群れをなして、人びとの周囲を徘徊して食べ残した屍肉をあさるが、親からはぐれたパピ（オオカミ、イヌなどの仔）が人間に飼われ、やがて狩りを手伝うようになったというのが、イヌのありえる起源だ。考古学的には三万年以上前、中央アジアに住んだネアンデルタール人や、二万年前にウクライナの氷原でマンモスを追った現生人類の遺跡から、小型化したオオカミ類似の骨が出土するのが、イヌに近づいた証拠とさ

れている。

しかし、近年の分子生物学の発達によって、イヌの歴史も再考を余儀なくさせられている。出土骨に残るミトコンドリアDNAの分析の結果、イヌがオオカミと分岐したのは、一〇万年以上前にもさかのほるといふのだ。このような年代は荒唐無稽としか思えないが、分子人類学者らが同じ方法によって、現生人類の起源が十数万年前にアフリカを出た一女性であるというイブ仮説を提唱した際、人類は世界各地で平行進化を遂げたという主張する形質人類学者らの拒絶反応と、その後の彼らの完敗ぶりから考えると、イヌの起源もそれくらいさかのほる可能性も想定内とせねばならない。



筆者が監修した新潟県立歴史博物館の縄文犬のジオラマ展示のレプリカ。精悍(せいけん)さを強調するために毛皮をとって肋骨が透けて見えるよう工夫した

遺跡から続々と

しかし実際に遺跡から愛玩動物が出土するのは、西アジアで一五五〇〇〇年から一五二〇〇〇年前のことで、特にイスラエルのアイン・マラッハ遺跡での年取った人間の墓に、オオカミがイヌのバビーが葬られていた例や、一万年から九〇〇〇年前のバキスタンのバルチスタン地方のある遺跡の同じ墓穴に葬られた一人の人間と五匹のキツズ(子ヤギ)の例があり、日本でも愛媛県上黒岩洞穴の一万年近く前の土器の層から出土したイヌの埋葬例がある。ネコムもこれまでは約四〇〇〇年前のエジプト古王朝のネコのミイラが最古とされて



佐賀市東名遺跡から出土した縄文早期の縄文犬(中央)。鼻筋がとおったところは二ホンオオカミ(奥)と共通し、現生の柴犬系の雑種(手前)の鼻筋とは異なり、大きさは両者の中間に位置する

いたが、最近、キプロスの九五〇〇年前の新石器時代早期の遺跡で、人とともに埋葬されていたネコの例が報告されている。もつともこの遺跡では、この島に生息しないキツネも出土している。島の人は、手当たり次第に野生動物の子どもをもち込んで可愛がっていたのかもしれない。

古代エジプト人がハイエナやシマウマを飼い慣らすと努力したことはよく知られ、そのほかの地域でも古代人がさまざまな野生動物を飼い慣らすと試みたが、結局、どれもものにならず、人間に可愛がられて家畜となることのできた動物は、自然界のうちごく少数に留まったというのが真相である。



東大阪市日下貝塚から出土した縄文晩期の犬の埋葬。首を曲げ、四角く葬られた姿勢は縄文人の屈葬と共通する

ペットの最期を看取る

—日本と韓国のペット葬儀

VELDKAMP, Elmer
(フェルトキャンプ・エルメル)

東京大学総合文化研究科

伝統的で手厚い供養

近年、日本だけでなく中国・韓国などでもペットの人氣が急上昇し、ペット文化にまつわる商品やサービスの売買は、玩具、衣服などおもにペットの生前に集中しているが、動物の寿命は人間より短い。飼っている主には、愛犬・愛猫をあの世に見送る不幸な日が必要訪れる。ペットが亡くなった際、土地をもっている人ならその遺体を庭の片隅に埋めることは可能だ。しかし、自分の土地をもたない人が多く、遺体の処理法が厳しく規定されている都市部では、それを代行するためのサービスとして「ペット霊園」が登場した。

日本の場合、葬儀だけで終わらず、その後も人間と同じように年忌供養をおこなう飼い主が多い。欧米と比べてはもち

ろん、アジアの国々と比べても特殊である。いちばん古いペット霊園は約一〇〇年の歴史をもっているが、都市を中心に本格的な増加や定着を見るようになってきたのは昭和四〇〜五〇年代である。東京だけでも一〇〇カ所を超えている。

霊園には、ペットのお墓の墓石のかたちや碑文、またロッカー式の納骨堂に飾つてあるミニ位牌やお香立てのような供養グッズなどがあり、飼い主のペットに対する愛着が詰まっている。また彼岸やお盆に「ペット供養祭」を開く霊園も多く、日本のペット葬儀には、伝統的な動物観と死者への手厚い心遣いが反映されているといえる。

食用との落差

韓国でも一〇年ほど前からイヌを中心にペット人氣が急上昇しており、都市部には日本をビジネスモデルにしたペット葬儀社がわずかに登場している。ただしソウルなどは環境規定が厳しく、火葬場と霊園が郊外の産業地区にあるなど日本に比べて「未開発」の部分が残るし、ペット葬儀社は法的に曖昧な存在ですらある。しかし日本と比べれば、仏教の干渉がほとんど見当たらず「自由」なかたちである。サービス内容が未だ固定していないため、客の好みでリムジンの送迎などのオプションを依頼できることが特

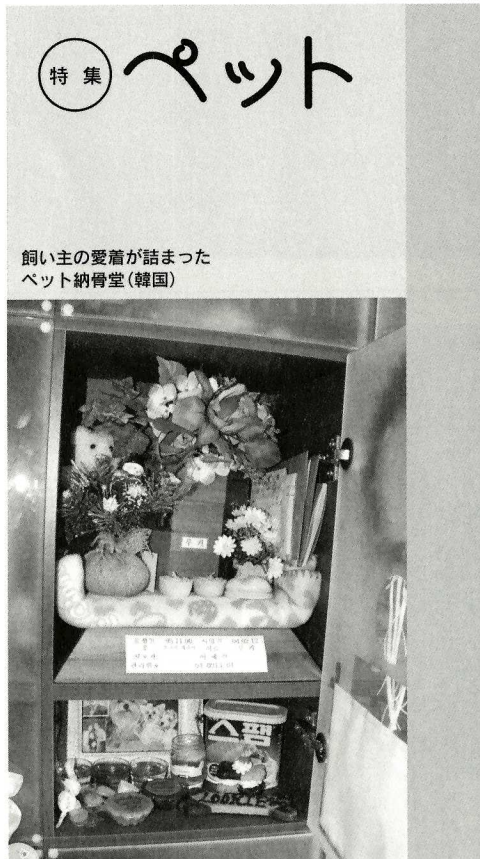
微的である。

ペット霊園の歴史はまだ浅い韓国だが、このように人びとの関心は高く、二〇〇六年の動物保護法改正案に「ペット葬儀」ということが盛り込まれるまでに至った。ただこれまで韓国でイヌといえは食用で

もあり、ペットとして愛されるイヌのイメージとの落差は大きい。この新旧イメージの混乱から、近年のペット優遇策には「贅沢すぎる」という批判の声も少なくない。近年よく耳にする「ペットの家族化」は、今後一体どこまで発展するのだろうか。



彼岸にペットのお墓を掃除するカップル



飼い主の愛着が詰まったペット納骨堂(韓国)

特集 ペット

ペット

特集

半には、イヌイットのなかにペット犬のほか、ネコや小鳥さらに金魚や熱帯魚を飼う人が増え始めた。村のなかでの仕事の原因でストレスをためているイヌイットは、愛玩動物を飼育すると心が癒されると語る。イヌイット社会では、動物と人間の関係が大きく変化しつつあるようだ。これもグローバル化やカナダ化の一面といえようか。

極北の狩猟民イヌイットが家畜化した動物は、イヌだけであった。それはペットではなく、猟犬やそりを引くイヌであった。イヌイットは極北という厳しい環境のなかで生きていくために、イヌを厳しく訓練し、あまやかすことなく接してきた。南からやってきた欧米人の目にはイヌイットがイヌを不当に手荒くとり扱っているように見えたため、イギリスの愛犬家団体は、一九六〇年代に「イヌイットはイヌを虐待している」とマスコミを通じて世界に訴えたことさえある。

カナダの極北地域では一九六〇年代に犬ぞりはスノーモービルにとって代わられたため、イヌの数が激減した。一九八〇年代からエコツーリズムや犬ぞりレースのためにイヌの飼育が極北の各地で再開されたが、かつてのような生活のための使役動物としてはなかった。

一九八〇年代半ばにわたしが滞在していたイヌイットの家庭では、イヌが屋内でペットとして飼われていたが、当時としてはめずらしいことであった。ある日わたしはイヌがいないことに気づいた。そのことを家の人に聞いてみると、子どもが目を放したときに、近所のエスキモー犬にかみ殺されたという。わたしはこのとき、事件そのものより飼い主がペット犬の死をほとんど悲しんでいない様子に驚いてしまった。日本では、ペットとして飼っている動物が死ぬと多くの飼い主は、あたかも家族が死んだようになげき悲しむ。それに比べると、イヌイットの反応はあまりにも冷淡であるように思えた。人間と動物との関係は、文化によってかなり違つものだとこのことを痛感した。

それから一〇年が経つた一九九〇年代後半

には、イヌイットのなかにペット犬のほか

増え始めた。村のなかでの仕事の原因でスト

レスをためているイヌイットは、愛玩動物を

飼育すると心が癒されると語る。イヌイット

社会では、動物と人間の関係が大きく変化し

つつあるようだ。これもグローバル化やカナ



根は仮面や装飾用にも使用されるので、一挙兩得といえる。

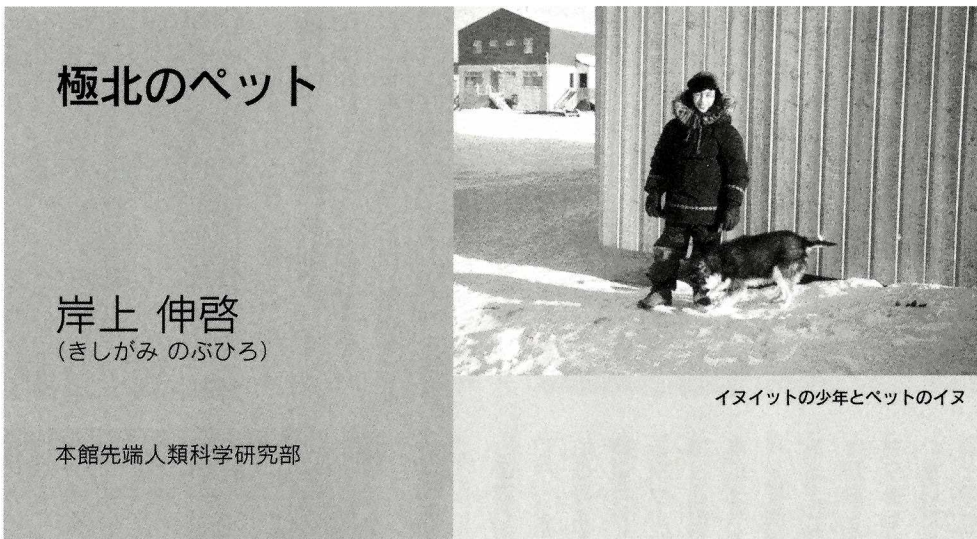
一九三八年に採取狩猟民ナンピクワラを調査したレヴィー・ストロースは多くの写真を撮った。そのなかにはイヌがよく写っている。また、少女の頭に子ザルが乗っかっているかわいらしい写真も何点かある。その一匹をレヴィー・ストロースは少女が欲しがっていたものと引き換え、旅の最後までペットとして愛玩していた。彼の名著『悲しき熱帯』のなかでは、サルは髪にとりつくだけでなく、その尾を首に巻きつけ、あたかも「生きている帽子」になると描写している。移動のときには、オウムやニワトリは負い籠かごのてっぺんに止まり、他の動物は腕に抱かれるとも記している。ナンピクワラは、桃太郎伝説ではないが、イヌ、サル、トリをしたがえて移動していたのである。

に、勝手気ままの代名詞のようなネコが、ペットは手綱で引かねばいけないという人間の規則に適應して、イヌの散歩を習得しているのはさらに不思議である。

イヌに関して言えば、これまた不思議なことに、路上で吠えるイヌに出くわしたことがない。犬恐怖症のわたしにはうれしい限りである。パリのイヌは飼い主以外の人間や街ですれちがう他のイヌにまったく無関心である。においを嗅いだり、脇目をつたりすることもない。イヌを飼ったことがないわたしには、それが飼い主に忠実なイヌの姿なのかどうかはわからない。むしろ、石造りの集合住宅の一角で、孤独な一人住まいの老人や独身者とともに暮らすうちに、イヌも没コミュニケーションに陥ってしまったように思える。それとも人間世界に入り込んで、イヌであることを忘れてしまったのだろうか。フランスのドッグフードには精神安定剤が入っているなどという話がまことしやかに聞こえる。

このようにイヌの都会生活マナーは申し分ないのだが、飼い主はイヌの「落し物」に無頓着である。おかげで、パリの街を歩くとウンがつく。飼い主はパリ市に「犬税」を納めると、路上の清掃を免除される。何年か前の税額は数千円程度だったと記憶している。「良識ある」パリ市民は税金を納め、アフリカからやって来る出稼ぎ労働者が路上の清掃をする。路肩を流れるセーヌの水も清掃のためである。いつもぬれている路上は厄介なものだ。冬は路面が凍りつき、外を眺めながら座っているカフェの客の前ですてんと転ぶはめになる。

この清掃というのがまたふるついている。パリ市の緑色の清掃車を見つけたら、なるべく早く早く風上に回避したほうがいい。ブラシで路上をこすりながら、ものすごい水しぶきを広範囲に撒き散らすのである。ウンがつくのは足元からだけではない。



極北のペット

岸上 伸啓
(ぎしがみ のぶひろ)

本館先端人類科学研究部

イヌイットの少年とペットのイヌ

アマゾンの桃太郎

中牧 弘允
(なかまき ひろちか)

本館民族文化研究部

アマゾンは生物多様性の宝庫である。動植物の種類において、その右に出る地域はないかもしれない。しかし、先住民のペットとなるとイヌとサル、それにオウムなどの鳥が思いつくかぶにすぎない。それ以外は家畜かペットか判然としない。熱帯魚や昆虫を愛玩しないことだけは確かかなようだ。

わたしが調査したブラジル・アマゾンの先住民の村では狩猟用にイヌを飼っていた。放し飼いであり、過剰な愛情をそそいでいるようには見えなかった。また、撃ち殺した母ザルにしがみついていた子ザルに餌をあたえ、かわいがっている姿を見たこともある。母は食用、子はペットとなったので、複雑な気持ちがあった。つかまえたヘビやカメを見せてもらったこともあるが、ペットとして飼うわけではない。いかにもペットらしいと思つたのはオウムである。風切り羽を切られたオウムは遠くに飛ぶことができず、子どもたちの格好の遊び相手となっていた。大型のコンゴウインコも飼っていたが、羽根飾りを作るわけではなかった。別の民族では、コンゴウインコの羽



街を歩くときには気をつけたいイヌの「落し物」
(撮影 櫻永真佐夫)

ウンがつく街ーパリ

三島 禎子
(みしま ていこ)

本館民族社会研究部